

# Edward Sapirの意味研究に関する一考察

－「心理」「感覚」「文化」の連関性を中心に－

大谷鉄平\*

(e-mail : teppeikun09@gmail.com)

## <目次>

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1. はじめに         | 3. 各論              |
| 2. 前提的議論        | 3.1. 「対照研究」の方法論    |
| 2.1. サビアの語られ方   | 3.2. 言語と文化とパーソナリティ |
| 2.2. 意味研究への私見   | 3.3. サビアによる意味論の特性  |
| 2.3. 言語研究の現代的潮流 | 4. 結語              |

キーワード：サビア(E. Sapir), 個人(Personality), 文化(Culture), 感覚(Sense), 心理(Psychology)

## 1. はじめに

エドワード・サビア (1884-1939) <sup>1)</sup>は、言語学史上、「サビア＝ウォーフの仮説」、  
「アメリカ構造主義言語学」等の範疇内で挙げられるが、一方、現代言語学の潮流に  
おいても、サビアの言語理論、特に意味論への寄与は、随所に垣間見られるものと思われ  
る。本稿では、比較文化の視座より、サビアの言語論、特に意味論分野での貢献を再  
考し、加えて、当該方法論の援用可能性として、筆者が行う研究の方法論（＝<開  
「メディア」的共時性>の提案）への接続に関しても、その有効性を確認したい。なお、

\* 長崎外国語大学 特任講師。本稿は、「Edward Sapirの意味論の、現代言語学への寄与に関  
する一考察」（2016年度日本比較文化学会国際学術大会、2016年5月21日、弘前学院大学）  
におけるシンポジウムのパネリストとしての発表）、ならびに同発表を修正した「Edward Sapirの意味研  
究における「心理」と「感覚」－現代言語学への有用性を中心に－」（韓国日本文化学会第51回  
国際学術大会、2016年10月22日、忠南大学校）の内容に関し、発表時のフロアとの議論を踏まえ、  
加筆修正したものである。

1) 以下、便宜的に、特別な場合を除き、言語学的概念、言語学者名など、カタカナ表記とする。

本稿は言語理念に関する整理ないし思索を主眼としているため、個別の言語事象を対象とした調査・分析は今後の課題とすることを、予めご了承頂きたい。

## 2. 前提的議論

### 2.1. サピアの語られ方—言語学の概論書と専門学会の現状—

認知ないし脳科学、危機言語との分野からの報告が言語学関連の学会（界）にて多い中、そもそも論の時点で、サピアについて再考することはいささか「時代遅れ」との批判もあるだろう。例えば、言語学史の諸資料<sup>2)</sup>では、ソシュールとの共通点ならびに相違点、あるいはブルームフィールドとの共通点・相違点が注目される傾向にある。すなわち、概略的には、以下のように、サピアの「位置づけ」はまとめられる。

- ・ソシュールとは独立に、アメリカでは構造主義言語学が発展した。
- ・アメリカ・インディアン（＝今でいうネイティブアメリカン）を対象に、記述的方法をとった。
- ・F.ボアズの文化人類学的手法を、サピアは引き継いだ。
- ・いわゆる「サピア＝ウォーフの仮説」の礎を築いた。
- ・ブルームフィールドの行動主義心理学の方法論の立場を、サピアは一部取り入れた。

（以上、大江（1999: pp.223-224）を抜粋）

大江（1999）の記述には、他の言語学史関連書物との齟齬もなく、納得するに十分な記述ではあるが、一方、素朴な疑問として、「日本語にも当てはまる言語理論なのか」、「サピアの具体的な言語理論はどのようなものなのか」との疑問に答えるものではなかった。

一方、日本エドワード・サピア協会は、2015年で年間大会第30回を迎えた学会であるが、当該協会の目的は、HP上に、次のようにある。

2) ミルカ・イヴィッチ（早田輝洋・井上史雄訳）『言語学の流れ』（1974、みすず書房）pp.321-348。  
また、ジョルジュ・ムーナン（佐藤信夫訳）『二十世紀の言語学』（1974、白水社）pp.98-114, pp.143-145, pp.262-264。

本会はサピア研究、言語学・人類学・言語文化、ならびに言語学史の研究とその発展に寄与し、会員相互の親睦を図ることを目的とする。（「日本エドワード・サピア協会規約」の第2条より）

事実、特定の言語学者や言語理論を主体とした学会・研究会は、日本では多くない（Yahoo!、google検索（検索日:2016年3月31日～4月2日）より）。特定の言語学者の諸理論に関し30年も検討し続けている点は、注目に値しよう。なお、当該協会では、年1回の研究大会と年1回の研究年報の発行があり、直近2年（2015年度、2014年度）の『研究年報』掲載論文等は、以下のとおりである<sup>3)</sup>。

（2014年3月発行分）

<論文>

- ・WALS(World Atlas of Language Structures)の言語類型論的パラメータの統計論的解析とその通時的解釈（ジョン・ホイットマン、小野洋平訳）
- ・言語変化の傾向と動向（小柳智一）
- ・形態素タイプの認定—日本語動詞における屈折を例に—（江畑冬生）

<ディスカッション・セッション論文>

- ・補助動詞「みる」の翻訳可能性について—芥川竜之介「鼻」とその英訳を資料として—（霜崎実）

（2015年3月発行分）

<論文>

- ・音韻論における'drift'（窪園晴夫）
- ・サピア意味論三部作（加藤泰彦）

<ディスカッション・セッション論文>

- ・新規の命名の類型と本質—言語進化におけるその意義—（大月実）

<研究ノート>

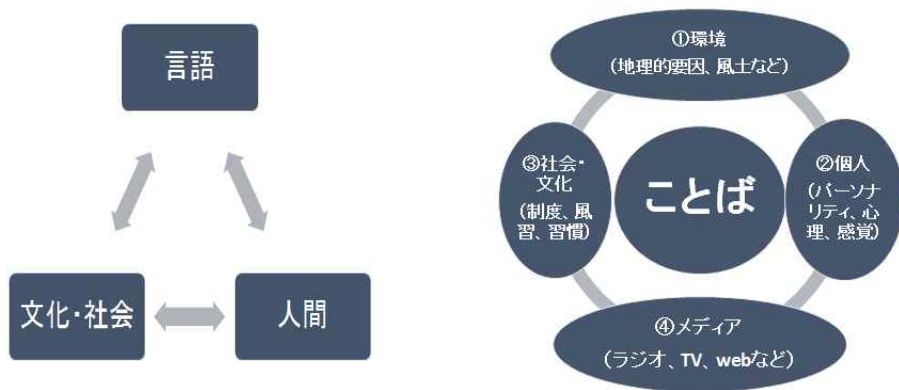
- ・ウォーフの理念を継承した外国語教育への提言—英国の言語教育政策調査結果をふまえて—（太田智加子）

3) 同協会は2012年に「25周年記念特別年報別冊」を発行し、同協会の年報が『ニューズ・レター』と称されていた第9号（1995）までも含め、掲載論考の総目録が記載されている。本稿では、紙幅の都合上、紹介を直近のものに止める。

以上、手元にある資料のみの俯瞰からも、サピアはその言語理論のみならず、言語現象に対する検討の方法論に関し、現今においても検討が行われている事実が認められよう。本稿では、サピアの意味論に関する先行研究（加藤（2015）、有馬（2012）、池上（1978）、井上（2016）等）を参考に、概論書の記述を超える現今での有用性について、素描を試みる。

## 2.2. 意味研究への私見-未知の語句・事物に対する自然的反応を切り口に-

本稿の展開の便宜上、まずは「個別言語研究と文化との接続性」に対する私見を示す。個別言語研究あるいは対照言語研究において、「文化、社会、人間」の相互関連性ならびに影響性への注視は、以下【図1】、あるいは、メディアを踏まえれば【図2】のような関連性が認められ、必須事項であることは疑いない。



(左) 【図1】 一般的に想定される相互影響性

(右) 【図2】 筆者が想定する「ことば」への影響性ならびに「ことば」との関連性

しかし、その必要性への「気付き」たるや、学術的言説の閲覧に比し、「実際に体感する」方法により経験的に醸成される（＝記述的アプローチが重要である）かと考える。ここでは、未知の語句への接触の際に生じる自然的な反応としての「意味内容付与欲求」、あるいは未知の事物への接触の際に生じる自然的な反応としての「命名欲求」に注目し、個人的な経験を踏まえ、意味研究における比較文化の方法論へのヒントを提示したい。

卑近な例ではあるが、日本人にとって、誰しも、小・中学生時代、卒業式で卒

業生を送る際、「仰げば尊し」（作者不詳）を歌った経験はあろう。筆者もまた、小学1年生の頃より、毎年歌っていた記憶がある。その中で、特に印象に残っている出来事として、「歌詞内容の誤解」がある。

あおげばとうし ①わがしのおん …中略… ②いまこそわかれめ いざさらば

特に、小学校低学年の頃は、歌唱練習の際に配られるプリントはすべて平仮名によるものであり、意味の理解に苦しんだことを覚えている。事実、筆者は当時、①を「和菓子の恩」、②を「分かれ目」、と、各々思い込んでいた。

以上の筆者の経験は、単なる「誤解」に過ぎないが、池上（1978:119-126）では、「有契性<sup>4)</sup>の獲得」として、人間の自然的な意識として「ある語形にはある語義が存在する」というものを認めたいうえで、未知の語句あるいは事物に対しては、「連想」のはたらしきによって「語形—語義」の有契性を獲得しようとする、と指摘している。また、上掲の筆者の経験とは逆に、「未知の事物」に対し、もともとある「似たような事例」からの連想で、語形を付与する代表例として、「鯨」がある。生物学的分類からは哺乳類ではあるが、見た目が魚である点から、「魚へん」が付与されている。なお、大月（2015:32-33）でも同様に、命名法と既存の語（名前）との関係性を指摘している<sup>5)</sup>。

一方、池上（1978:124-125）では、以上の議論を敷衍し、「民間語源」に通底する特徴として抽出したうえで、その価値に対する提言を行っている。すなわち、一般的に「民間語源」が「誤った語源づけ（p.124）」とされる傾向を認めたいうえで、「民間語源は現在の話し手が自分たちの言語に対してどのような意識を抱いているかを示しているという意味でも、大変興味ある現象なのである。

（p.125）」と、有意義性を主張する。当該主張は、複数の点において重要であると筆者は認めたい。具体的には、以下のとおりである。

- i. 相対的言語観—ある言語文化における「語形—語義」の有契化の自然的欲求に対し、科学的視座からの真偽判断からくる真偽をもととした価値判断を行っていない点。

4) なお、池上（1978）では言語の恣意性と有契性とを「相補関係」と捉えており、当然、恣意性を否定する立場にはない。

5) 大月（2015:33）では、池上（1978）にはない「表現上の増加」の事例を挙げている。すなわち、「キクラゲ（＝木に生えたクラゲのようなもの／木耳:木に生えた耳のようなもの）」、「ウミネコ（＝海にいる、猫の鳴き声のような声を出す動物）」などである。

- ii. 語形あるいは語義付与における「連想」の必然性—言語文化にある生物（＝人間）の共通性として、未知の語句・事物に対し、連想（＝心理的作用）がはたらくことを指摘した点。
- iii. 「民間語源」の有意義性—一般的には「誤解」として処理されがちな「民間語源」に関し、話し手の心理的側面や話し手のいる社会、文化が反映する事例として捉え直している点。

i. ~ iii. の見解は、以下に示す有馬（2012）や加藤（2015）にも挙げられているとおり、サピアによる意味論の前提となる「文化・社会・個人（パーソナリティ・心理・位相。【図2】参照）」への注視を正統に引き継ぐものであると認められる。換言すれば、上掲①、②の筆者の経験が「誤解」と認められるのは、あくまで同「文化・社会（【図1】の「文化・社会」、あるいは【図2】の①、③）」に属する大勢との比較の結果から判断されるものであり、その根拠は「位相（筆者が幼く、知識が未熟な状態にある）」あるいは「パーソナリティ（【図2】②）」に求められるからであると判断されよう。

また、池上（1978）の記述に認められる「『民間語源』の興味深さ」は、「比較文化の方法」の観点から翻って述べるならば、個別文化に属する人々の「ことば」に対する考え方や社会的慣習を記述する動機となり得るものとする。例えば前掲の①、「和菓子の恩」との誤解は、「和菓子」が存在しない言語文化では生じ得ない（あるいは当人の「連想」から、別の事物をイメージする）であろう。すなわち、①～③のように、真偽判断が同言語文化に収斂するレベルでは「誤解」であろうとも、研究・調査を行う者と異なる言語文化における事例を扱う際は、科学的・論理的にはたとえ明らかに「誤り」であったとしても、当該社会の慣習ならびに個人の心理面の発露として認めることができる。また、大月（2015）の議論を敷衍すれば、ある固有名称が一般名称を超えて地域社会に浸透している事例（「ホッカイロー使い捨てカイロ」、「ホッチキス—ステーブラー」、「サランラップ—食品包装用ラップフィルム」など）は、当該社会における一社会的実態を表すのみならず、マーケティングの視座からは、個別コンテンツの浸透度や社会構成員である個人の言語認知に関わるデータが抽出される可能性を孕んでいる。

### 2.3. 言語研究の現代的潮流—社会言語学と社会言語科学を焦点に—

日本エドワード・サピア協会が、単にサピアの言語理論について語り合う「場」に止まらない事実は、2.1.に示した規約からも明らかである。重要なのは、ボアズやウォーフにもみられる文化人類学的視座からの言語研究、特にその（調査に基づく）記述的手法が、現今においても有益である、との点である。一方、UGや認知理論に代表されるように、現代言語学においては、通言語学的手法の潮流もまた認められる。しかしながら、当該手法による研究成果は、サピアらの方法論を「否定する」ものではない。一例として田中（1983:177-235）では、1977年に行われたというチョムスキーとミツ・ロナという人物との対話を抄録している。その中に、次のような記述がある。

社会言語学は文法を取り扱っていない。それは共通語というような内容を与えると思なされている。個人的にはおぼくはそのような知見が科学的な対象になるとは考えない。論じることのできる対象はただ、均質な共同体の中の体系を理念化したものにもとづく。（田中（1987：210）

この文脈からは、チョムスキーの（あるいはソシュールからの）「言語学＝科学の一部」とのはっきりした思念が窺える。しかしながら、「社会言語学」はその埒外にある、とあるが、「均質な共同体の中の体系を理念化」との研究目的自体は、まさに「量的・記述的手法」の必要性を示唆するものであり、現代では、コーパスを用いた分析、ならびにメディアの発達から、「科学的考察」を行う手法としての「量的調査」が十分に可能となっている。重要なのは、チョムスキーにとっての「文法」は、言語活動における社会的慣習や個人の心理的作用や気質（＝パーソナリティ）といった付加要素を排除した体系を意味するのであり、加藤（2015）の分類でいうところの〈論理的（logical）〉部門にあたりと判断される点である。

これに関連し注目したいのは、日本に「社会言語学会」が無く、一方で「社会言語科学会（The Japanese Association of Sociolinguistic Sciences）」が存在する事実である。学会名称には必ず何かしらの信念があるのが常ではあるが、2015年3月現在、社会言語科学会の会長である橋元良明氏は、当該学会誌『社会言語科学』（第17巻第2号、2015年3月）に、巻頭言として「「社会言語科学会」という名前（pp.1-2）」を記し、次のように述べている。

私の記憶では、学会を立ち上げるにあたって、まずその学会名が議論になりました。研究

会の名前を引き継いで「社会言語学会」にするという案もありました。この案に最も強硬に反対されたのが徳川先生でした。「社会言語学会」では扱う研究領域が狭すぎるというお考えからです。当時の徳川先生の構想を付度するに、かなり真剣に「社会言語科学」という学問を考えておられたかと思います。つまり、言語学のみならず、社会学、心理学、情報科学、認知科学等、文理をまたいで、言語やコミュニケーションの機能の解明を目指す学問の場の創設です。さらには脳科学等も含め「言語科学」の構想もお持ちだったはずで、(橋元 (2015:1) )

上掲、橋元 (2015) に出てくる「徳川先生」は、当該学会を設立した徳川宗賢氏を指す。徳川氏の学会開設に伴う発想は、ボアズ、サピア、あるいはレヴィ=ストロースをはじめとした「フィールドワーク」に基づくボトムアップ的・記述的手法に加え、いわゆる「言語科学」に範疇化されるような、静的な意味での言語理論ないしトップダウン的手法による諸理論を包含するものと判断される。その証左として、年に2回行われる同学会の研究大会では、あらゆる分野からの発表が行われており、学際的な学術的交流の場として発展を続けている。

以上のチョムスキーの発話ならびに日本における「社会言語科学会」の設立理念から抽出される点としては、「社会言語学」との学術領域におけるいわば「総合的」側面が挙げられよう。すなわち、一方の「言語科学」はあくまでことば(音韻、形態、文法、意味)の静的体系の分布や布置にかかわる領野であり、そこに「文化・社会・パーソナリティ(有馬(2012))」が付加されることによって、我々の言語活動が具現化する、という認識が垣間見られる。そしてその一方で、以下の加藤(2015)で指摘されたサピアの意味論的特質は、その後者、なかでも(個人の)心理的側面への重視が認められる、というものである。

### 3. 各論

#### 3.1. 「対照研究」の方法論—サピア『言語』と井上(2016)との接続性をめぐって—

各論に入るうえで、まず第一に、意味に関する議論を包括する「対照研究」自体の方法論に関し、井上(2016)で述べられた内容を踏まえ、その輪郭を明確

化したい。

ソシュールを代表としたヨーロッパ構造主義言語学とは独立したかたちでアメリカ構造主義言語学は発展したとされる。しかしながら、両者の相同性はすでに多くの先行研究により指摘されており、その要点には常に「分類」、「分布（あるいは『布置』）」との概念が内在する<sup>6)</sup>。特に、ネイティブ・アメリカンの（当時の言語研究者には斬新に映る）言語文化を記述・資料化する土壌が備わっていた点では、環境的必然性としての「対照研究」が喫緊の課題であったことは疑いない。

サピア『言語（岩波版）』（p.62）には、次のような経験が記されている。

わたしは二回、聡明なインディアンの青年に、わたしの用いる音声体系に従って、かれらの言語を書くことを教えたことがある。かれらには、音そのものを正確に写す方法を教えたにすぎない。二人とも、語をその構成音に分けることを学ぶには多少の困難をおぼえたが、語を決定することには少しも困難をおぼえなかった。兩人とも即座に、しかも完璧の正確さで、語を決定してみせた。…中略…このような素朴な話し手や記録者相手の経験は、どれほど多くの純粋に理論的な議論にもまして、語に明確に形成的な統一性があることを確信するのに役立つのである。

以上のサピアの経験に関する記述は、彼が『言語』において方法論上の他言語の扱いにおける「（分析上の）公平（＝相対的）な視座」を保っていたことを示唆しよう。当該視座の保持たるや、比較文化の方法論的な議論にも援用可能、かつ、現今での多様な研究・分析への前提的事項となると考える。

これに関連し、同様の視座が現今においても引き継がれている事例として、「韓国日本語学会第33回国際学術発表大会（2016年3月19日、カトリック大学校）」における井上優氏による講演、「なぜ対照研究が必要か」を挙げ、その内容を概略的に示し（＝井上（2016））つつ、逐次、本稿における筆者の考えとの接続性に関し考察したい。

井上（2016:8）では「比べる」には「3つの意義がある」とし、以下の点を挙げている（抜粋）。

6) 当該認識論が科学分野での考察に背景化されていることも、すでに多くの論考により正当化されており、ここでは池田（1992）の一部のみを引用するに止める。すなわち、「何かを分けるためには、何かになまえをつける必要がある。…中略…基準は名とは限らないが、他人に伝えようとすると、それはただちに名となる（池田（1992:12））」とすると同時に、同書では当該思念をもとに生物学上の既存研究を脱構築している。

- ① 「比べる」ことは「よく観察する」ことにつながる。
- ② 「比べる」ことは「重要な特徴を際立たせる」ことにつながる。
- ③ 「比べる」ことは「全体の中での位置づけを知る」ために必要である。

以上の①は、サピアの「フィールドワーク」との行動に、③は題目の「分布（あるいは『布置』）」との考え方と、各々、等価とみなされよう。さらに、②に関しては、井上（2016:8）では「『我々のところは…だったが、今は…』、『日本人は…だが、韓国人は…』」との例を挙げているが、換言すれば、これらは「通時的な研究における『比べる』」・「共時的な研究における『比べる』」をさす。そのうえで、井上（2016:8）では、これらを言語研究に特化したうえで、「言語の対照研究とは、比べて考えることを通じて、各言語の特性を明らかにし、各言語を公平に見る（相対化する）ための視点を見出す研究である」と論じる。

これに関連し、卑近な一例を筆者の韓国生活経験から挙げれば、7)以下のような「素朴な疑問」も、井上（2016）のいう「（対照研究における）考察に値する問題（井上（2016:9））」になるかもしれない。すなわち、「あるニュースにおける、記者による現場中継、その終わり（スタジオに戻す）の場面」では、韓国では、必ず、次のように記者が発言する。

- (1) 「○○（中継の場所）에서 △△（放送局名）、××（記者名）입니다.  
（日本語訳:○○から、△△（の）、××です。）」

(1)は、日本人としては複数の次元で違和感が残る。すなわち、＜表現形式＞の次元では「～입니다.（～です。）」ではなく、「～でした。」ではないか、との疑問、＜表現内容＞の次元では「△△（放送局名）、××（記者名）」などと、わざわざ付け加えないのではないか（「押しつけがましい、自己主張が強い」との印象にもつながる）、との疑問が、少なくとも頭をもたげよう。日本人として自然な「中継場面」は、作例ではあるが、おおよそ(2)のようになろう。

- (2) アナウンサー:「それでは、○○から、××記者がお伝えます。」

記者:「はい、こちら○○です。…中略…以上、○○（現場）からお伝えしました。」

7) 以下に挙げる個別的言語事象に関する具体的考察は、今後の課題としたい。

(1) と (2) との差異からくる「違和感・疑問」は、日本人側からは、「『なぜ』韓国(語)では…『のか』」との形式で概念化しよう。しかしながら、当該形式は井上(2016)の「各言語を公平に見る(相対化する)ための視点」にはあたらない。

個別言語研究・通言語的研究へのヒントの提供ということを抜きにしても、一般論として、「X語には…という現象がある。それはなぜか?」と考えるよりは、「X語とY語には…という相違がある。その相違はどのような相違として一般化できるか?」と考えるほうが、問いが具体的で考えやすいところがある。(井上(2016:12))

井上(2016)の以上の指摘を援用するならば、先述の「個人的経験に基づく素朴な疑問」もまた、次のように換言されるのではないだろうか。

<表現形式> 「個別場面末における日本語と韓国語の『時制・相』の捉え方(ないし表し方)は、どのような差異として一般化できるか」

<表現内容> 「個別場面における日本と韓国の『自身に関する情報提示』の方略は、どのような差異として一般化できるか」

このような問題の所在に対する捉え方がサピアの言語研究に対する姿勢と通底することは、想像に難くない。すなわち、『言語』にみられるネイティブ・アメリカンの言語に関する検討は、前掲の通り、自身の音声「体系(岩波版『言語』では、『パタン』との表記も多用されている)」のネイティブ・アメリカン言語への適用可能性に関する経験をもとに、音声のみならず、形態・統語面を含め、当該言語を相対化した視座から、言語実態を記述している。また、加藤(2015)に倣えば、意味面における姿勢もまた、同様であったものと推察される。

結果的に、議論を極端に単純化してしまうならば、サピアと井上(2016)との「言語研究における比較・対照の方法論」における相同性の要点は、次のような形で導出できよう。

<研究過程ならびに指針>

- ① 差異への「気づき」と比較・対照研究対象の実態に対する具体的把握
- ② 比較・対照研究対象への公平的・相対的視座からの問題設定

- ③比較・対照研究対象を含む、背景化された構造の抽出
- ④当該構造における各々の事象の分類、あるいは分布（布置）の記述

なお、(1)と(2)との差異に関する検討は本稿の目的ではないが、〈表現形式〉に関しては、井上(2016)にて、別の「相」に対する日韓語対照研究の結果として、次のような指摘がある。

- ・日本語の完成相は時間の流れにそった(コマ送りのな)展開の意味を含み、それが文脈に合わない場合は継続相を用いる。
- ・韓国語の完成相は事態の存在を(紙芝居的に)叙述するだけであり、継続相は特定の場面において観察された状態を叙述する場合に用いる。

(以上、井上(2016:13)を抜粋。傍線は筆者による)

当該指摘を用いて両者の差異を説明できよう。すなわち、韓国語では、「中継場面で」はまさに「紙芝居の一枚の中」であり、そこで完成相を用いた叙述を行わない。したがって、「이었습시다(=でした)」ではなく、「입니다(=です)」との表現形式が選択される。一方、日本語では、「時間の流れ」重視から、「場面の終わり」が焦点化され、文脈上、完成相(でした)が選択される。

一方、現代的技術として画期的ではあるものの、意味の〈論理的側面〉にのみ焦点が当てられるだけでは実際の使用に限界がある好例を示したい。すなわち、いわゆる「自動翻訳」は、極めて便利かつ有効性のある技術であるが、その内実として、言語変換が、基本的に「変換前の言語」に依拠している事実がある。例えば、(2)を踏まえ、日本語的なく表現形式〉の発想でweblio翻訳(<http://translate.weblio.jp/korean/>、検索日:2016年3月28日)を用いた場合、「日→韓」の変換は、(3)→(4)のようになってしまう。

(3) 서울에서, YTN, (人名)였습니다.

(4) 서울로부터, YTN, (人名)이었습시다.

記者名(人名)の誤変換は除外するとしても、「【場所】+から」に「【時間】+から」をさす「~부터」があてられていたり、「~でした」がそのまま「~이었습시다」に

なっている点は、正確な変換とはいえない。無論、自動翻訳の技術自体が、今後より発展し、(3) → (4) のような「誤変換」が改善される見込みは高い。しかしながら、その進化は、あくまで使用場面自体をプログラミングすることで蓄積してゆくだけのものであり、生身の人間の言語活動のような、文化・社会的慣習や個人の心理的作用（【図2】参照）に伴う応用とは根源的なレベルで異なる。<sup>8)</sup>そのような技術発展の裏側に「ロボットの人間化」を認める傾向は、少なくとも誤謬を孕んでいると指摘せざるを得ない。

### 3.2. 言語と文化とパーソナリティ—有馬（2012）を切り口に—

以下では、日本エドワード・サピア協会発行『研究年報』のうち、本稿の論旨に関与する諸論考を参照しつつ、ことばの意味への比較文化的方法による研究のあり方を素描したい。

『言語』におけるサピアの記述からも推察されるとおり、「無意識」への注目、ないし心理学的関心から「パーソナリティ（すなわち、社会の構成員である『個』）」への注目があつたことは、よく知られている。ただし、『言語』にみられる考察のみでは、その片鱗以上の、すなわち証左となる確固たる言及は確認されない。その意味で、まずここでは、『研究年報』に収められた諸論考のうち、特に表題の要素の関係性と「意味」との連関性に注目した有馬（2012）<sup>9)</sup>を切り口とし、その中で掲載されたサピアの諸論考にまつわる記述を参照しつつ、加藤（2015）に確認される具体的な意味論に通底するサピアの理念を抽出する。

有馬（2012）では、多くのサピア論文選集、記念論文集を挙げたうえで、言語学の領域における「文化」「パーソナリティ」との関係へは「あまりよく知られていない（有馬（2012:21））」との現状を指摘している。一方、Harris, Z. S. (1951) “Reviews: Selected writings of Edward Sapir in language, culture, and personality” *Language* 27, pp.288-333から「文化とパーソナリティ研究の方法は言語研究と同様のもの

8) これはAI（人工知能）の場合にもいえる議論であろう。昨今、AIが碁や将棋で人間に勝利した、あるいは大学入試の模擬試験で高得点を獲得した、などのニュースがしばしば取り上げられるが、これもまた、議論を極端に単純化してしまうならば、単に無数の経験をデータとしてインプットし、適した場面でアウトプットすることの繰り返しの過ぎず、＜非論理的側面＞に関する事項は、まったく存在しない。なお、当該機械的機能に連関し、1990年に流行語大賞を受賞した「ファジィ」に関する「理屈づけ（松井（2013））」実態を素描した論考を、大谷（2015b）にて提出している。

9) 有馬（2012）の方法論的骨子は、（邦訳されていないものを含む）サピア関連資料の再検討にあり、その量の膨大さから、十分に信頼される考察が提出されている。なお、有馬（2012:22）では、齊木（2011）の、サピアのbiographyに関する諸書籍・論考に対する緻密な検討結果に執筆の契機を得たことを明言している。

である (p.22) 」との指摘を引用し、言語を含めた3領域の「有機的な結びつき (同上、傍線は筆者による) 」への再照射の必要性を強調している<sup>10)</sup>。

これに対し、「パーソナリティ」に関するサピアの見識は、一例として「偏流 (drift) 」に関する議論の中でも、「無意識」と結びつけて顕現する。(岩波版『言語』pp.265-266) すなわち、「言語に起こる重要な変化はすべて、まず最初は、個人的変異として存在しなければならない。これは、完全に真である。(岩波版『言語』p.266。傍線は筆者による) 」「言語の偏流には、方向性がある。…中略…ある言語の偏流はある特別な方向に累加する個人的変異を、その言語の話手が無意識に選択することで形成される。(岩波版『言語』p.267。傍線は筆者による) 」などである。また、有馬 (2012:22) によれば、「(筆者注:『言語』とは異なる論考の記述をもとに) 文化・言語・歴史のパタンは『Interpresonal relations (対人関係) 』から生じてくるとサピアは述べている」という<sup>11)</sup>。また、岩波版『言語』pp.358-380、すなわち「第十章 言語と人種の文化」に一貫するサピアの信念としても、「言語には背景がある。…中略…言語は、文化—すなわち、社会的に相続され、われわれの生活の特質を決定する習慣や信念の集合—から離れては存在しない。(p.369) 」とまとめている<sup>12)</sup>。以上の「文化の心理学」感に起因するサピア流の意味論の特徴とは何か。加藤 (2015) に抄録された諸論考を挙げる前に、まず、直前の有馬 (2012) にも確認された「心理」「無意識」「パーソナリティ」重視の言語観に関し、その輪郭を描写したい。

有馬 (2012:27) では、前掲のダーネルが他の論者とともに編纂したサピアの論文集 (Darnell, R. and J. T. Irvine (eds.) 1999. “*The Collected Works of Edward Sapir*” Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.) の第Ⅲ巻、1~3 sections. の記述を挙げ、「生物学 (遺伝) 的なもの」「胎内経験」「生後2~3歳ごろまでの経験」が基本的パーソナリティに影響を与えるとのサピアの考えを指摘している。これらの条件は、「前言語的であるがゆえに感情的な存在でしかない

10) この点は齊木 (2011:31) にも「言語学者は三領域の研究がサピアにおいていかに総合されていたかを知る必要がある (傍線は筆者による) 」と記されており、また、ダーネルによる書籍執筆の動機となっていると指摘している。

11) 有馬 (2012:24) では、齊木 (2011) でも紹介のあるダーネル論文を引用し、「サピアは文化とパーソナリティが切り離された別個のものとして対立しているという印象を与えているかもしれない“Culture and personality”よりも“Psychology of culture”という言い方を好んだ。」としている。また、有馬 (2012:25) では、サピアの後半生の研究の中心にこの「文化の心理学」があるとし、「文化の在り処は個人であり、個人に合わせてできていくことを重視している」とまとめている。

12) ただし、「言語」「人種」「社会」各々の枠組みは、一致・対応しないとする。また、個々の人種、文化における優劣を認めない相対観に依拠していることは、後のウォーフの考察とともに、「言語相対観」としてよく知られるところである。

こと、すなわち無意識であること（同上）」の説明となり、「無意識であるがゆえに自分でコントロールすることができ」ない時期を指すという。一方、後に（いわゆる）「言語形成期」と呼ばれるようになる時期に至ると、「自らの必要性に合わせて文化を自分の視点で解釈して取り入れることができるようになる」とともにパーソナリティが育っていく（同上）」と論じられているという。

繰り返しとなるが、本稿では有馬（2012）による抄録ならびに記述以上にサピア自身の思索・考察を辿ることはできない。しかしながら、以上の整理から導出される論点として、岡本（1985）が発達心理学的言語観から術語化した「一次のことば」「二次のことば」に通底する理念が、サピアの言語・文化・パーソナリティに関する議論に存在していたのではないかと推察される。岡本（1985:33-52）を端的に抜粋するならば、「一次のことば」には「家庭で習得」「現実生活場面の中で、具体的な状況と関連」「場の文脈依存」「特定の親しい人々の間で了解可能」「原則的には一対一の対話」といった特徴、「二次のことば」には「学校で習得」「現実の場面から離れて使用」「未知の不特定多数を対象可能」「一方向的な伝達行為」といった特徴が指摘されている。

同様に、日本における発達心理学的言語観からの意味研究としては、池上（1978）の第五章「意味の変化（pp.127-168）」での議論を援用したい。同論は意味変化のメカニズムに関し、「連想<sup>13)</sup>」を基軸にその「型」を「類似性 similarity」と「近接性 contiguity」に大別し分類したものであり、現代的な認知観に基づく意味論の「骨子（あるいは基礎）」とも呼べよう。

### 3.3. サピアによる意味論の特性

一方、サピアの意味論上の功績に関しては、加藤（1990、1992、1999）<sup>14)</sup>の報告がある。その要点は、かつての伝統文法、あるいは20世紀半ばに隆盛する生成文法、さらには認知言語学、語用論といった諸々の学術的方法論とも一線を画した、「客観的に観察可能な

13) 池上（1978:133）では「連想」を「あることと他のことの間に関連性があると感ずること」と定義している。

14) 加藤泰彦（1990）「サピアのGradingとその拡張について」『ニューズ・レター』第4号、日本エドワード・サピア協会、pp.17-26。同（1992）「サピアのTotalityと否定について」『ニューズ・レター』第6号、日本エドワード・サピア協会、pp.38-47。同（1999）「サピアの『言語』におけるEconomyの概念についての覚え書」『研究年報』第13号、日本エドワード・サピア協会、pp.61-65。同（2015）「サピア意味論三部作」『研究年報』第29号、日本エドワード・サピア協会、pp.13-29。

形式的・分布的特性に基づいた分析」との特質として考えられよう。一方、加藤 (2015:14-15) は、サピアの意味論上一貫した理念として、言語的意味の総体を i 論理特性、ii 心的過程としての kinaesthetic feeling (運動ないしは各種の等級付けに関する感覚、加藤 (2015) では「K-感覚」とも表記しており、本稿もこれに従う) との側面に分けたうえで、後者への注目が最大の特徴であると指摘している。以下、特に加藤 (2015) の記述に従い、サピアによる意味論の要点を整理し、その特性と現代言語学への有効性を確認する。

加藤 (2015:13) では、「アメリカ構造言語学が、実に豊かな多様性を内包していたという事実」のひとつにサピアによる意味論研究があると指摘したうえで、Totality (1930)、Ending-Point Relations (EPR: 1932)、Grading: A Study in Semantics (1944) (以上の () 内はサピアによる論考の出版年) に通底する理念としてのK-感覚を指摘している。ただし加藤 (2015:16) では、「K-感覚は三部作を横につなぐ中核概念であると思われるが、意外にもその明確な定義は、三部作を通じてどこにも与えられていない」とし、論考中の記述を抽出し把握を試みている。

- ・対象物をそのまま保持したり、分解したり、集めたりする際に働く操作またはK-感覚的経験
- ・K-概念は、静的な意味を超え、純粋に論理的な分析が不十分なしは誤解を招くことであることを示す
- ・論理的判断は、K-感覚に関しては中立的な判断となる
- ・テスト (確認) 可能性一潜在的に異なる方向性をもつ要素に対する運動感覚の不一致により、当該感覚を適性にテストしうる

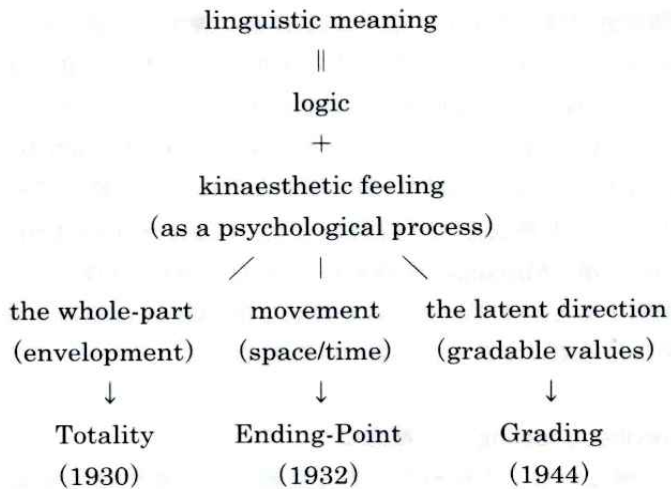
(以上、加藤 (2015:16) を抜粋)

以上をもとに、暫定的な把握を提出したものが、次の一文である。

・ kinaesthetic feeling (K-感覚) は、言語的意味の非論理的な側面を担うものであり、静的 (static) な論理的意味に「運動ないしは等級付け感覚」を加え、意味の総体を捉えることを可能にする。(加藤 (2015:16-17)、傍線は筆者による)

すなわち、言語的意味は【論理的 (logical) 意味+ (心的過程としての) K-感覚】という構成にあり、サピアはこのうち後者の実態把握を重視した、というのが加藤 (2015) の見

解である。



【図3】加藤（2015）がまとめる、サピアによる意味論の研究対象

ところで、この「心的過程としてのK-感覚」の存在は、前掲の有馬（2012）に指摘されるサピアの「文化・社会・パーソナリティ」重視の姿勢を反映し、また、言語的意味の比較対照研究に対する方法論に重要な示唆を与えるものとする。たとえば前述2.2.の「鯨」の場合は、大雑把には次のように分析される。

1. 論理的意味…海洋に生息する＜哺乳類＞（の一種）
2. 心的内容…海洋に生息する＜魚類＞（の一種）

1. と2. とを同一レベルで対応させると矛盾となるが、我々が日頃「鯨」を見る際、このような矛盾に頭を悩ませることは決してない。この事実を、「（意味の総体としての）鯨」に「論理的側面／非論理的側面」が並存していることを裏付けよう。また、池上（1978）の記述を援用するならば、後者の成立条件としては、「魚類が生息する社会」ないし「（他の）魚類の存在を知る個人」といったものがあり、そこからの連想がはたらく（＝心的過程）ことが前提となろう。

## 4. 結語

### —〈間「メディア」的共時性〉の提案を添えて—

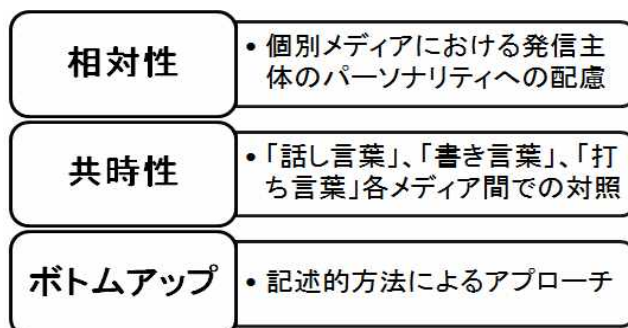
本稿の主たる目的は、「比較文化の方法論」との観点に立ち「ことばの意味」に関する新たなアプローチの可能性を提示することにある。そこで、本稿の結語として、筆者が進めている研究のうち、「ことば・メディア・マーケティングのトリニティ的相互影響性の記述」の現状での課題を挙げ、当該研究における方法論の学術的意義への指摘、ならびに問題の提起を行うことで論を閉じたい。

既に「メディアとことば」を主題とした研究成果は、2.3.にて掲げた「社会言語科学会」を筆頭とし、社会言語学の領野で多く認められる。しかしながら、個々の研究は、新聞・雑誌メディア、ラジオ・TVメディア、webメディア（＝【図2】④）における個別言語現象・言語活動の質的あるいは量的研究として成り立っており、各々が接続された研究成果は、管見の限り、ほとんど確認されない。一方、これら各メディアにみられる表現やナラティブには、往々にして外的要因たるマーケティング的諸要素（イデオロギー、販促意図や戦略、受信者側の反応など）が作用していることが推察されるものの、これを踏まえた（ことばに関する）研究成果もまた、ほぼ皆無というのが現状である。無論、「広告表現」や「流行語」に関する考察は、しばしば認められるものではある。しかしながら、その目的は、個別表現が有する形式的側面（音韻・形態的特徴）の特殊性の記述であったり、「いかに効果的か」といった販促効果（＝機能的側面）の検証であったりする。すなわち、①ある個別表現やナラティブの各メディア間での意味内容の差異、②ある個別表現やナラティブに付与した発信主体の意図、③コンテンツの閲覧・購買を企図した個別表現の含意の変遷、など、意味・内容的側面に特化した検討ないし実態解明はほぼ未開拓の研究分野と指摘される。

これに対し筆者は、テキストマイニングツールのKH Coderを用いた流行語の「理屈づけ（松井（2013））」の推移に関する検討や民話のナラティブ様態とメディアとの関係性に対する検討を通じ、上掲のトリニティの様相の記述化を進めている。そしてこれらの検討では一貫して、マーケティングの視座からの横断的考察も（外的要因の作用性として）包含している。無論、筆者はマーケティングを専門

としてはないが、既に井上（2016）の言及に見たように、対照研究の前提として、必ずしも対象分野に関する網羅的専門性は必須要素ではない。一方、サピアの言語学者、人類学者、詩人…といった多彩な側面（あるいは多彩な分野への関心）は、横断的・学際的研究の実践における必須事項といえよう。また、有馬（2012）や加藤（2015）に見たように、分析における「文化」・「社会」・「個人（パーソナリティや感覚、心理的側面）」への注視ならびに相対的な扱いと「分布・布置」の記述は、サピアの「比較文化の方法論」を最も明晰に物語る事実である。その試みは、結果的に言語学史上「アメリカ構造主義言語学」の範疇内で語られるのが一般的になっているのではあるが、あえてその特質を一語にまとめれば、＜間「文化」的共時性＞として示されよう。そして、当該特質を援用し、筆者による研究の特質を内省するならば、＜間「メディア」的共時性＞として提出できるのではないかと考える。

＜間「メディア」的共時性＞の発想は、サピアによる方法論を援用し、情報発信の場たる各々の「メディア」に個別の「文化」の成立を仮定したうえで、マーケティング活動の主体たる「個人（発信主体たる企業・メディア側／受信主体たる閲覧者・消費者側）」の認知的側面や位相、イデオロギーを加味したアプローチ、と置き換えたもので、その相同性を端的にまとめれば、【図4】のとおりである。



【図4】 サピアによる研究方法と筆者による方針との相同性

今後、上述の流行語に関する考察や地元民話に関する考察をはじめとした試論が一定の体系性を獲得すれば、現今におけるサピアの方法論の有効性が改めて確認されることとなる。なお、当該の理論的側面での検証ならびに改善は、今後、現今のアプローチに基づく個別現象の考察を通じ、行ってゆきたい<sup>15)</sup>。

最後に、サピア『言語』（岩波版）の記述を引用し、今後の研究の方向性に対する助けとしたい。

言語には背景がある。言語を話すひとびとは、一つの人種（またはいくつかの人種）、すなわち、身体的な特徴によって他の諸グループから区別される一グループに属している。また、言語は、文化—すなわち、社会的に相続され、われわれの生活の特質を決定する習俗や信念の集合—から離れては存在しない。（安藤訳、p.358）

サピアが『言語』にて明示した「言語の背景」に対する認識は、上掲の有馬（2012）のいう「文化・社会・パーソナリティ」の反映性を示唆するとともに、加藤（2015）に示されたサピアによる意味研究の特質としての【K-感覚】重視の基礎たるものである。また、比較・対照研究の方法論としては、井上（2016）に通ずる点も指摘され、結果、サピアによる（意味論をはじめとした）研究手法の現代言語学における通用性が浮き彫りとなったことを改めて強調したい。そして、ここに挙げられた「社会」をそのまま「メディア空間」に置き換えることを提案する筆者の方法論においてもまた、当該認識は通用するに思われるのである。

### 【参考文献】

- 有馬道子（2012）「サピアの「本物の文化」—言語・文化・パーソナリティの関係—」『研究年報』24、日本エドワード・サピア協会、pp.21-30.
- 池上嘉彦（1978）『意味の世界』日本放送出版協会、pp.1-230.
- 井上優（2016）「なぜ対照研究が必要か」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会予稿集』韓国日本語学会、pp.8-18.
- 池田清彦（1992）『分類という思想』、新潮社、pp.11-58.
- エドワード・サピア（安藤貞雄訳、1998）『言語』、岩波書店、pp.1-398.
- 大江孝男（1999）『言語学』放送大学出版会、pp.223-224.
- 大谷鉄平（2015a）「「商用ナラティブ」研究の原状と課題」『日本文化学報』64、韓国日本文化学会、pp.107-127.
- 大谷鉄平（2015b）「流行語「ファジィ」の「理屈づけ」の推移」『日語日文学研究』

15) 大谷（2015a）や大谷（2016）では、言語的発信に文化・社会・パーソナリティが背景化されていると仮定し、現行のナラティブに関しその実態を量的・質的調査に基づき記述した。このふたつから導出された考察として、「話し言葉」「書き言葉」「打ち言葉」との文体的差異により可視化されるメディアごとに、事物の意味内容に差異が確認されることを指摘した。詳細は同稿を参照されたい。

- 95-1、韓国日語日文学会、pp.181-203.
- 大谷鉄平 (2016) 「ナラティブへの、メディアの作用性—「はなたれ小僧さん」の「エビスナマス」を例に—」『日本文化学報』68、韓国日本文化学会、pp.183-207.  
([https://DOI.org/10.21481/jbunka.68.201602.183.](https://DOI.org/10.21481/jbunka.68.201602.183))
- 大月実 (2015) 「新規の命名の種類と本質」『研究年報』29、日本エドワード・サピア協会、pp.31-40.
- 岡本夏木 (1985) 『ことばと発達』岩波書店、pp.1-206.
- 加藤泰彦 (2015) 「サピア意味論三部作」『研究年報』日本エドワード・サピア協会、pp.13-29.
- 斉木美知世 (2011) 「二十年後のサピア—Regna Darnell, Edward Sapir 2010をめぐる—」『研究年報』25、日本エドワード・サピア協会、pp.23-38.
- 田中克彦 (1983) 『チョムスキー』、岩波書店、pp.177-235.
- 橋元良明 (2015) 「「社会言語科学会」という名前」『社会言語科学』第17巻第2号、pp.1-2.
- 松井剛 (2013) 『ことばとマーケティング』硯学舎、pp.1-334.
- 
- 大月実 (2015) 「新規の命名の種類と本質」『研究年報』29、日本エドワード・サピア協会、pp.31-40.
- 岡本夏木 (1985) 『ことばと発達』岩波書店、pp.1-206.
- 加藤泰彦 (2015) 「サピア意味論三部作」『研究年報』日本エドワード・サピア協会、pp.13-29.
- 斉木美知世 (2011) 「二十年後のサピア—Regna Darnell, Edward Sapir 2010をめぐる—」『研究年報』25、日本エドワード・サピア協会、pp.23-38.
- 田中克彦 (1983) 『チョムスキー』、岩波書店、pp.177-235.
- 橋元良明 (2015) 「「社会言語科学会」という名前」『社会言語科学』第17巻第2号、pp.1-2.
- 松井剛 (2013) 『ことばとマーケティング』硯学舎、pp.1-334.

논문 투고 일자 : 2016. 12. 19 .
논문 심사 일자 : 2017. 01. 21.
게재 확정 일자 : 2017. 01. 22.

---

 <要旨>
 

---

 Edward Sapirの意味研究に関する一考察  
 —「心理」「感覚」「文化」の連関性を中心に—

大谷鉄平

エドワード・サピア (1884-1939) による言語理論や分析手法は、現代言語学の潮流においても示唆的であるとの報告がある。本稿では、先行研究をもとに、言語論に限らない複眼的視座より、サピアの言語論、特に意味研究での特質を整理するとともに、日常的な言語現象に対する援用可能性を確認した。

サピアの意味研究において重視される点は、「共時性」や文化の「相対性」はもとより「パーソナリティ」、すなわち個人の心理、感覚に認められる。有馬 (2012) では、サピアによる諸研究の結果、「言語—文化—パーソナリティ」の「有機的な結びつき」が指摘され、加藤 (2015) では、サピアが「論理的意味」に加え、【K—感覚】という心的過程を念頭に置いていた、との報告がある。また、池上 (1978) における意味研究の焦点である「連想」「有契性」もまた、サピアによる議論と通底する。一方、比較・対照研究の方法論としては、井上 (2016) の主張にサピアの分析手法が合致することから、現今でもサピアの理念が有効であることが認められる。

以上を応用し、筆者は「メディア」的共時性との概念を構築することで、複眼的視座からの新たな研究の試みが可能であると考ええる。

 A consideration about the meaning study by Edward Sapir  
 -With a focus on mutual relations of the "psychology", "sense", "culture"-

Otani, Teppei

This report explores the sociolinguistic theory of Edward Sapir (1884-1939) and the analytical method. It suggests for present-day linguistics. This report reviews the characteristics of Sapir's language theory, particularly within semantics, and confirmed the invocation possibility of a daily language phenomenon.

Thus "personality" is important as is "synchronicity" and "relativity" within each culture in the semantic analysis of Sapir. Recent studies by Arima (2012) and Kato (2015) support Sapir's hypothesis. Similarly, "Association" and "motivation" are the focus of a semantic study by Ikegami (1978) each are fundamentally connected to Sapir's ideas. Finally, about the methodology of a comparison-contrast in Inoue's (2016) report is connected Sapir's analysis.

The writer contends that the trial of the new methods from the point of view of multiple lenses will be make possible the building a conceptual the synchronicity between media.